







病害虫発生予察情報予報第 9 号 (12 月の予報)

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	12月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病害虫 (抜粋)
タマネギ	べと病	並	 タマネギ べと病 一次感染株
	ボトリチス葉枯症	並	
	1. べと病 本圃での感染を防ぎ、一次感染株(越年罹病株)の発生を抑えるために、本圃定植前(定植5日前~前日)にジャストフィットフロアブルを、定植14日後頃にオロンディスウルトラSCを散布する。 2. 乾腐病 発生時期は主に春期~貯蔵中であるが、発生を抑えるためには、定植前の防除対策が重要となる。地床育苗の苗は、定植直前にベンレート水和剤またはトリフミン水和剤を根部浸漬し、セル育苗の苗は、定植前日に同薬剤をトレイに灌注する。		
イチゴ (本圃)	うどんこ病	並	 ハダニ類
	灰色かび病	並	
	ハダニ類	並	
	アブラムシ類	やや多	
1. ハダニ類 一部、多発生している圃場が認められる。薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。また、天敵カブリダニ剤を導入する場合は、放飼前に天敵に影響の少ない薬剤を用いて、ハダニ類の寄生を0頭に抑える。 2. チョウ目害虫 葉だけでなく、花蕾や果実も食害して被害が拡大するおそれがあるため、圃場観察で早期発見に努め、薬剤の効果が出やすい若齢幼虫のうちに防除を徹底する。			
キュウリ	べと病	並	 キュウリ黄化えそ病
	うどんこ病	やや少	
	褐斑病	多	
	アザミウマ類	やや多	
	コナジラミ類	多	
1. ミナミキイロアザミウマ：黄化えそ病、タバココナジラミ：退緑黄化病 アザミウマ類、コナジラミ類ともに発生が多い。また、これらが媒介するウイルス病の発生も認めている。これらの虫を次作に持ち越さないため、薬剤防除を栽培後期まで継続するとともに、植え替え時には、キルパーを用いるなどして株を完全に枯死させた後に株を抜き取り、施設密閉処理を十分な期間(地温15℃の場合18日以上)確保して実施する。			

作物名	病虫害名 ^{注1)}	12月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
トマト	葉かび病	並	 黄化葉巻病
	灰色かび病	並	
	コナジラミ類	多	
	1. コナジラミ類：黄化葉巻病、黄化病 コナジラミ類の発生が低密度のうちに薬剤防除を行う。ウイルス病の罹病株を認めた場合は、早急に除去処分するとともに、コナジラミ類に対する薬剤防除も併せて実施する。 2. 葉かび病、灰色かび病 発病部位の早期除去、予防的な薬剤散布、適切な湿度管理を組み合わせで防除する。		
キャベツ	菌核病	並	 チョウ目害虫（オオタバコガ）
	黒腐病	並	
	アブラムシ類	少	
	チョウ目害虫	やや多	
1. チョウ目害虫 結球部に食入した幼虫や、齢が進んだ幼虫に対しては薬剤の効果が著しく低くなるため、若齢幼虫のうちに薬剤防除を徹底し、ヨトウ類では卵塊や分散する前の若齢幼虫は見つけ次第、捕殺する。 2. 菌核病 冬春どりキャベツにおける本病の主な防除適期は、土壌中の菌核からの子のう盤の形成が増加する11～12月頃と推定されることから、この時期の予防散布を徹底する。			
キク	白さび病	並	 チョウ目害虫 (オオタバコガ)
	アザミウマ類	やや少	
	アブラムシ類	並	
	ハダニ類	やや少	
	ハモグリバエ類	並	
	チョウ目害虫	やや多	
1. チョウ目害虫 施設内での発生が認められる。齢が進むと防除効果が低下するため、圃場をよく観察し、若齢幼虫期の防除を徹底する。			

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病虫害総合防除計画」も参照してください。

病虫害総合防除計画掲載アドレス

https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji003101844/index.html

QRコード→



II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（2 ページの注釈にリンクが有ります）。

写真

- 1～2 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
4 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

12 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 12 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（令和 6 年 11 月 21 日）を基に、「気温：平年並」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%) 及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1 ヶ月予報における 12 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	30	30 (7.8℃)	40	並
降水量	30	40 (59.5 mm)	30	並

Ⅲ. 12月の予報

タマネギ

[【概要に戻る】](#)

定期調査 19 育苗圃場、防除員 4 育苗圃場
調査日：11月18日～21日

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年並

(12月に発病することはまされたが、苗床あるいは本圃で感染するリスクがある。)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況 (育苗圃)

発生株率：0% (平年0%、前年0%)

平年比：並(±)

(2) 圃場の菌密度 (本圃)

平成25年以降、発生株率・発生圃場率はともに高

い傾向が続いており、本圃の菌密度は高いと推察される。(±~+)(図2参照)

(3) 12月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件(±)

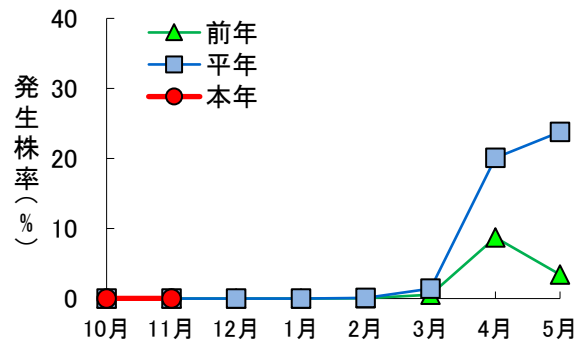


図1 タマネギでのべと病の発生推移

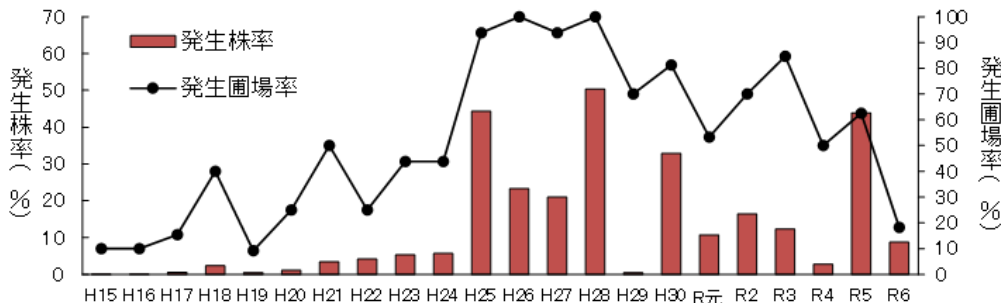


図2 タマネギ本圃でのべと病の発生圃場率と発生株率の年次推移 (4月下旬の定期調査結果)

3) 防除上注意すべき事項

本圃での感染を防ぎ、一次感染株(越年罹病株)の発生を抑えるために、本圃定植前(定植5日前~前日)にジャストフィットフロアブルを、定植14日後頃にオロンディスウルトラSCを散布する。

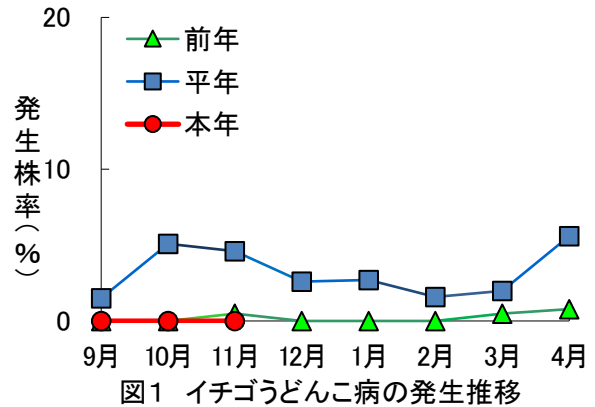
イチゴ（本圃）

[【概要に戻る】](#)

定期調査 10 圃場、防除員 6 圃場
調査日：11 月 18～20 日

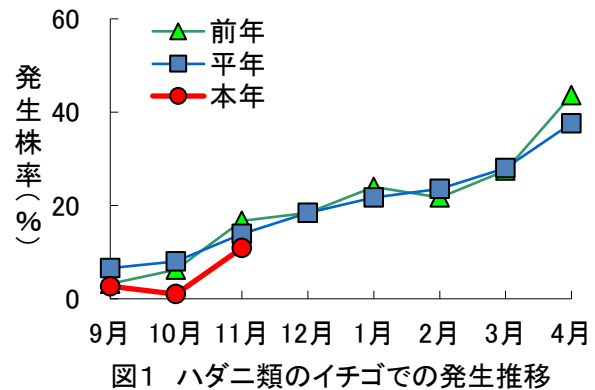
1. うどんこ病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図 1 参照）
発生株率：0%（平年 4.5%、前年 0%）
平年比：並（±）
 - (2) 12月の気象予報
降水量は並で、並発生の条件（±）
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 定期的に 10～14 日間隔の薬剤防除を実施する。



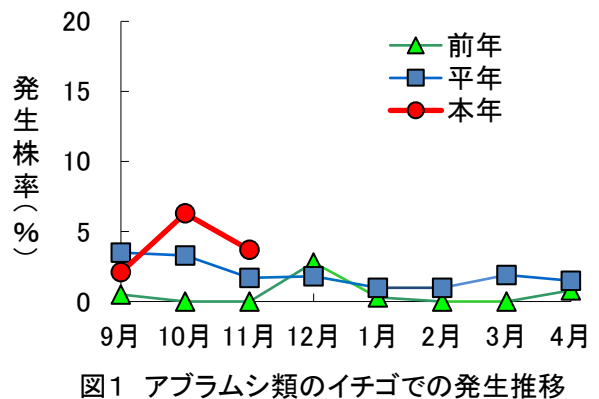
2. ハダニ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年並
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図 1 参照）
発生株率：10.0%（平年 13.9%、前年 16.8%）
平年比：並（±）
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。
 - (2) 天敵カブリダニ剤を導入する場合は、放飼前に天敵に影響の少ない薬剤を用いて、ハダニ類の寄生を0頭に抑える。



3. アブラムシ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図 1 参照）
発生株率：3.3%（平年 1.7%、前年 0%）
平年比：やや多（±～+）
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 圃場周辺の雑草は本虫の発生源となるため、除草を行う。
 - (2) 発生初期に薬剤防除を実施する。



キュウリ

[【概要に戻る】](#)

定期調査 3 圃場、防除員 4 圃場

調査日：11月18日～20日

1. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：34.3% (平年 9.5%、前年 20.7%)

平年比：多(+)

(2) 12月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件(±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 定期的に10～14日間隔の薬剤防除を実施する。

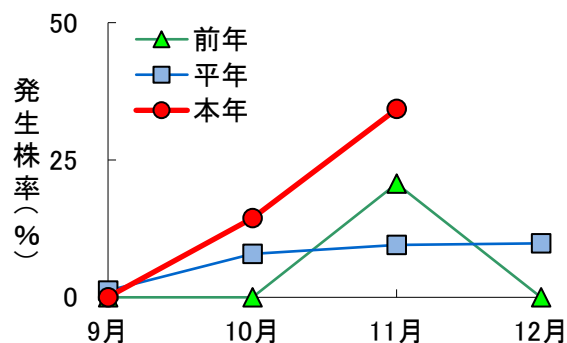


図1 キュウリ褐斑病の発生推移

2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：14.3% (平年 6.5%、前年 14.3%)

平年比：やや多(±～+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 前作で発生した害虫を次作に持ち越さないため、薬剤防除を栽培後期まで継続するとともに、植え替え時には、キルパーを用いるなどして株を完全に枯死させた後に株を抜き取り、施設密閉処理を十分な期間(地温15℃の場合18日以上)確保して実施する。

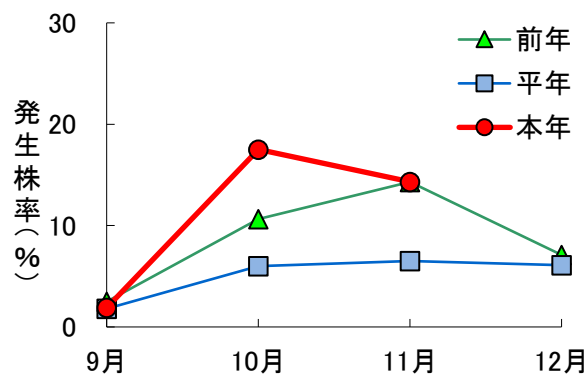


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移

3. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：58.6% (平年 22.4%、前年 46.4%)

平年比：多(+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) アザミウマ類を参照。

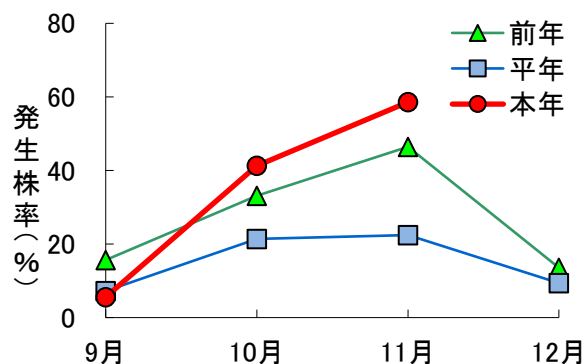


図1 コナジラミ類のキュウリでの発生推移

トマト

[【概要に戻る】](#)

定期調査 6 圃場、防除員 4 圃場

調査日：11月18～20日

1. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：21.0% (平年 6.9%、前年 10.5%)

平年比：多 <+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 低密度のうちに薬剤防除を行う。

(2) ウイルス病の罹病株を認めた場合は、早急に除去処分するとともに、コナジラミ類に対する薬剤防除も併せて実施する。

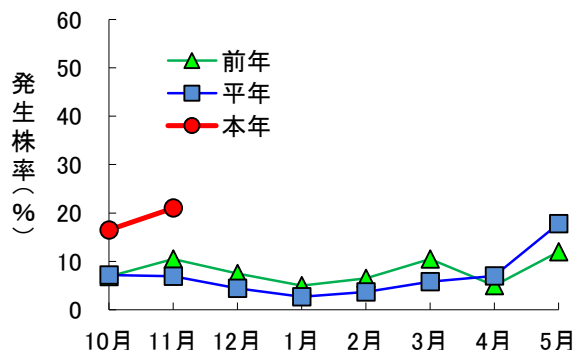


図1 コナジラミ類のトマトでの発生推移

キャベツ

[【概要に戻る】](#)

定期調査 8 圃場

調査日：11月18日～20日

1. 菌核病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率：0% (平年0%、前年0%)

平年比：並 <±>

(2) 12月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件 <±>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 冬春どりキャベツにおける本病の主な防除適期は、土壌中の菌核からの子のう盤の形成が増加する11～12月頃と推定されることから、この時期の予防散布を徹底する。

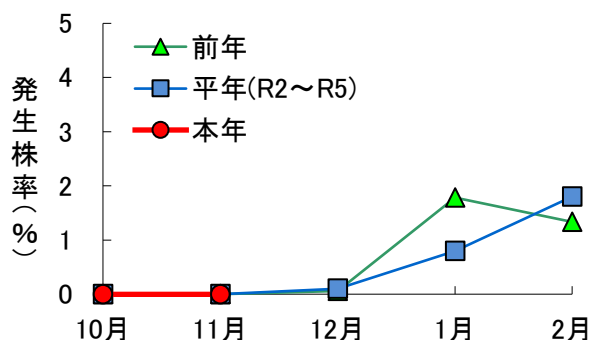


図1 キャベツ菌核病の発生推移

2. チョウ目害虫

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：3.1%（平年2.8%、前年2.5%）

平年比：並（±）

②フェロモントラップによる調査（佐賀市川副町・農業試験研究センター設置）

ハスモンヨトウの誘殺数は、平年より多く推移している（図2）（+）

オオタバコガの誘殺数は、平年より多く推移している（図3）（+）

シロイチモジヨトウの誘殺数は、平年より多く推移している（図4）（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 結球部に食入した幼虫や、齢が進んだ幼虫に対しては薬剤の効果が悪く低くなるため、若齢幼虫のうちに薬剤防除を徹底し、ヨトウ類では卵塊や分散する前の若齢幼虫は見つけ次第、捕殺する。

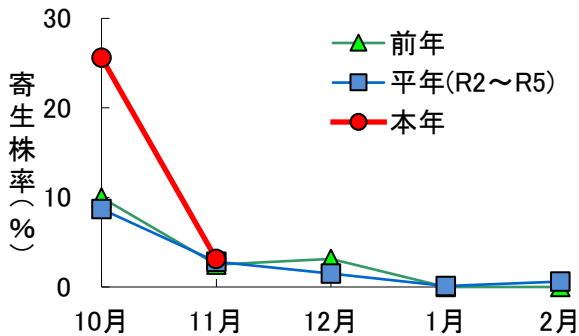


図1 キャベツでのチョウ目害虫の発生推移

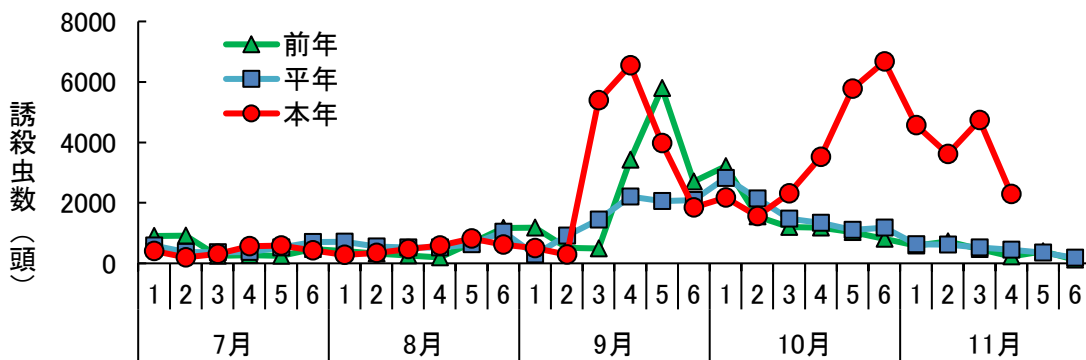


図2 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半月別誘殺数

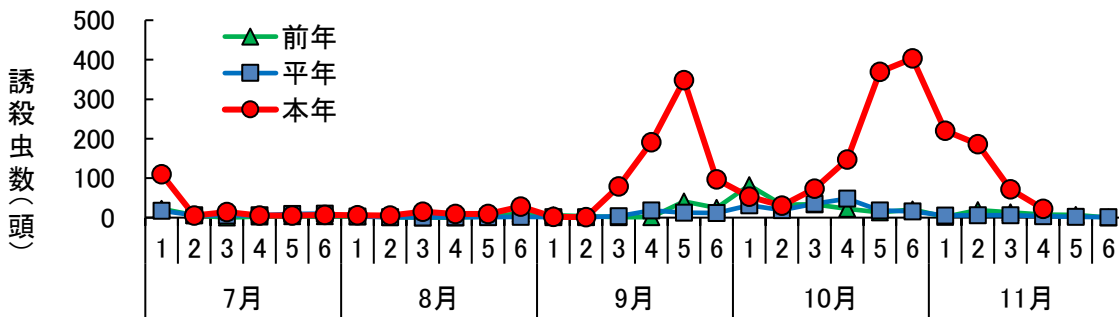


図3 フェロモントラップによるオオタバコガ雄成虫の半月別誘殺数

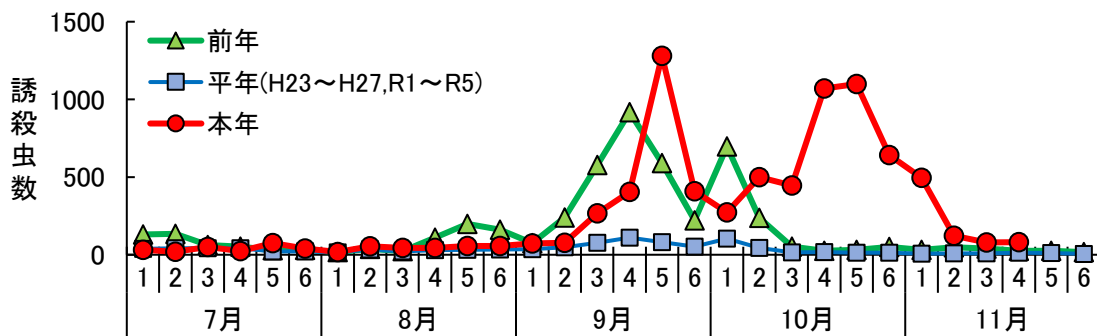


図4 フェロモントラップによるシロイチモジヨトウ雄成虫の半月別誘殺数

キク

[【概要に戻る】](#)

定期調査 8 圃場

調査日：11月18～20日

1. 白さび病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0% (平年 1.3%、前年 0%)

平年比：並 (±)

(2) 12月の気象予報

気温は並、降水量は並で、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が多湿にならないように適宜換気を図るとともに、発生前から薬剤を定期的に散布する。散布する際は、葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるように散布する。

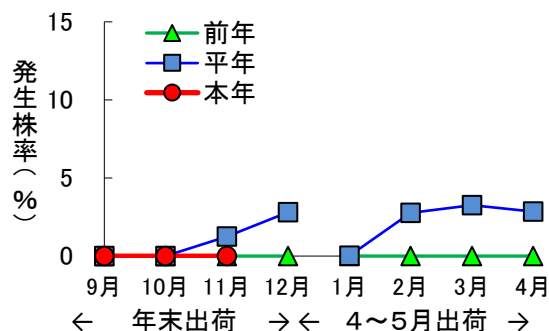


図1 キク白さび病の発生推移

2. アザミウマ類 (クダヒアザミウマ、ミナキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0.3% (平年 4.0%、前年 0%)

平年比：少 (ー)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生状況をよく確認し、低密度からの防除を徹底する。
本虫は、薬剤の到達しにくい葉裏などに寄生しているため、散布むらがないよう、十分量を丁寧に散布する。
- (2) 圃場周辺の雑草は発生源となるため、除草を徹底する。
- (3) ミカンキイロアザミウマは、キクえそ病 (TSW)・茎えそ病 (CSNV) のウイルスを媒介する。発生株を認めた場合は速やかに取り除き、媒介虫に対する防除を徹底する。

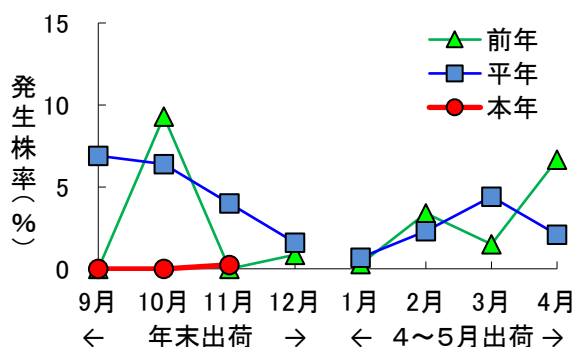


図1 アザミウマ類のキクでの発生推移

3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査

発生株率：0.5% (平年 4.5%、前年 4.0%)

平年比：やや少 (一~±)

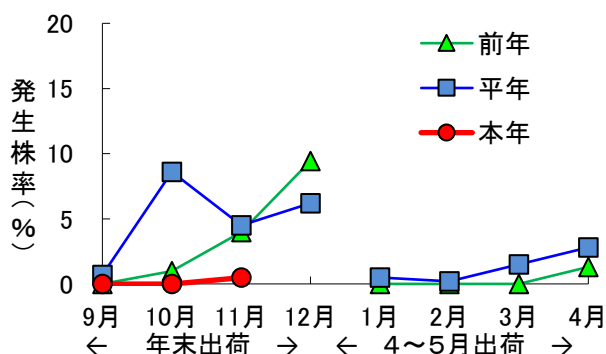


図1 ハダニ類のキクでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生状況をよく確認し、低密度からの防除を徹底する。本虫は、薬剤の到達しにくい葉裏などに寄生しているため、散布むらがないよう、十分量を丁寧に散布する。

4. チョウ目害虫（ハモンヨトウ、材バコガ、シイマイヨトウ）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査(図1参照)

被害株率：0.5%（平年0.2%、前年0.3%）

平年比：やや多（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内での発生が認められる。齢が進むと防除効果が低下するため、圃場をよく観察し、若齢幼虫期の防除を徹底する。

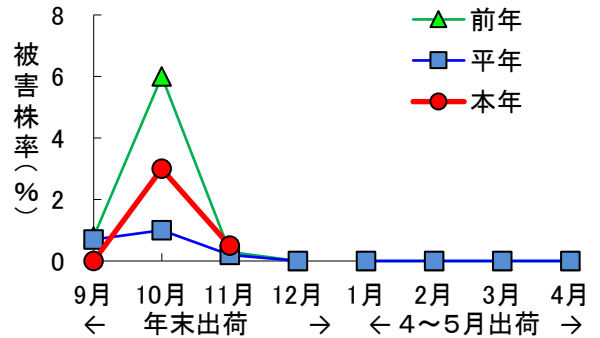


図1 チョウ目害虫によるキクでの被害株率の推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321899/index.html

病虫害総合防除計画掲載アドレス https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji003101844/index.html

防除セ QRコード



防除計画 QRコード

